



TITLE:

# 前研究科長からのあいさつ: 京都大学大学院教育学研究科の挑戦

AUTHOR(S):

矢野, 智司

---

CITATION:

矢野, 智司. 前研究科長からのあいさつ: 京都大学大学院教育学研究科の挑戦. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 2-2

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179765>

RIGHT:

## 京都大学大学院教育学研究科の挑戦

前京都大学大学院教育学研究科長

矢野 智司



学力の問題、いじめの問題、不登校の問題、児童の虐待……さまざまな教育問題が起こっています。どれも見過ごすことのできない重要な問題です。個別の問題について具体的な問題解決を図るとともに、そのような問題が発生する家庭と学校と地域と制度の根本自体を理論的に問い直し、教育関係者との互いの協働によって、教育の課題に向かいあうことは、教育・心理の研究者の使命といえます。

このような課題を実現するために、教育学研究科では、プロジェクト：特別教育研究経費（教育改革）「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」を、平成19年度から23年度まで継続して実施いたしました。本プロジェクトでは、その名称からもわかりますように、子どもの「生命性」と「有能性」の育成をまず教育の基本課題として捉えています。この2つは教育を駆動する力であるとともに、教育の目的ともいえるべきものです。生命に触れ生きる喜びのともなわないところでは、有能な能力は十分に発達しませんし、確かな技能や技術や技を持たないところでは、生命は形をもつことはできません。どこまでも高く学ぶことと、またどこまでも深く生きることとは、ともに教育の基本課題なのです。

そのうえで、私たちはつぎの3つの目的を立てました。

- ①教室・学校・地域のフィールドにおいて、教育諸科学のコラボレーションによって、具体的なアクションを通して教育問題の解決をはかること（教育問題の解決）
- ②そのような経験を重ねることで、教育問題の解決を可能とする既存の教育諸科学の再構築をはかること（教育諸科学の再構築）
- ③さらにこの問題解決と学問の再構築のプロセスを通して、実践的知性を身につけた研究者を育成すること（優れた研究者の育成）

どれもすぐには実現することのできない大きな課題ですが、これらの課題はそれぞれが相互に密接に結びついており、そのために同時に追求することが不可欠だったのです。

このように、本プロジェクトは、子どもの「生命性」と「有能性」という異なる次元をつないで両者の育成をはかるという極めて先進的で野心的なプロジェクトですが、その実現を教育諸科学のコラボレーションによって実現するところにも工夫があります。もちろん、教育の研究者や心理の研究者が協力して教育問題の解決をはかるというアイデア自体は、特に目新しいものではありません。他の多くのプロジェクトが、複数の学問領域を横断して計画され実施されているところから考えても当然のことといえます。また教育が個人の心の変容から学校制度やその他の教育制度というシステムまでわたる多次元的な事象であることを考えるなら、教育問題を複数の研究領域の研究者の協力によって捉え直し、その解決をはかるということは、当然の問題解決の戦略ともいえるでしょう。しかし、実際に協力しあって同じ問題の解決をはかるとなると、これは実に大変なことです。そのためには、それを可能にする仕掛けが必要となります。

本研究科では、このような異なる学問を研究している研究者たちの協働作業が可能となるように、「コラボレーション・センター」を新たに設置いたしました。このセンターを中心に活動することで、情報の交換がスムーズになり、相互の信頼も高まり、協力関係は目に見えてよくなりました。異なった研究方法をもつ研究者が同じフィールドに立ち、実際の問題について議論していくなかで、それぞれの学問の異なる視点からのアプローチが互いに重なることで、問題がこれまでとは違って捉えられるようになる経験が何度もありました。このようにして、このプロジェクトは、教育学や心理学の学問の在り方自体を変革する重要なものだという認識が、少しずつ明らかになってきました。

本報告書は、本研究科でのプロジェクトの5年間にわたる活動の記録とその成果と反省と自己評価を示したものです。予想を越えた成果をあげることができたものもあれば、そうでない課題もあります。プロジェクトは終了しましたが、私たちの挑戦はまだ始まったばかりです。これからも粘り強くこの課題に取り組んでいきたいと考えています。

最後になりましたが、このプロジェクトに御賛同いただき、私たちが快く受け入れ協力してくださったすべてのフィールドの関係者に、深甚の感謝を申し上げます。